

## 「モンゴル放談会」

2022年7月9日 於 長野道梓川下りサービスエリア レストラン 2階 「常念坊」にて

放談会参加者

板垣 雄三（信州イスラーム世界勉強会 代表／東京大学名誉教授）

川村 光郎（駱駝舎 主人）

色平 哲郎（医師 佐久総合病院地域医療部地域ケア科医長）

若林 悠平（樹木医 「美鈴湖もりの国」のジェネラルマネージャー）

渡辺 聡 （信州イスラーム世界勉強会 事務局）

昼食をとりながら、まずは雑談、モンゴルの「食」の話から、

川村：日本では食後のコーヒーがすっかり定着していますが、モンゴルではよその家に行けば必ず出てくるものがあります。スーテーツァイ(乳茶)です。磚茶(たんちゃ)と呼ばれる、まだ発酵していない茶葉をレンガ状に圧縮したものを金槌で叩き削り、さらにすり鉢に入れてこまかく砕きます。これを水に入れて約 10 分煮出し、数回かき混ぜて茶が出ていることを確かめたら牛乳(馬乳やラクダの乳でもよい)を加えて温めます。地方によっては塩を入れたり、バターあるいは粟のような穀物を入れれば香ばしくなります。ぼくが家で作るときは、ほうじ茶を鍋に入れて煮立たせ、牛乳を加えて、塩を一つまみ入れます。茶漉しを使って茶碗に注ぎ、客人に呈します。モンゴルのような美味しさは期待できませんが、ほうじ茶の香ばしさとわずかな塩味が口の中をサッパリとさせ、好評ですよ。

渡辺：磚茶は、ビタミンの補給源で遊牧民の健康維持に不可欠なため、古くから長城をはさんだ南北の交易のキーアイテムだったようですね。中近東に駐在された方が異口同音に、現地で食べる肉料理の美味しさを言われます。川村さんは、山登りやモンゴル語の教科書の件で現地での生活も経験されているわけですが、モンゴルも美味しそうですね。

川村：モンゴルで美味しかったものと言えば、やはり羊の肉(ホニ・マハ)ですね。92 年にモンゴル側からの要請で、モンゴル文字による小学生用国語教科書を 6 万冊作りしました。

これを飛行機で運び込んだとき、そのお礼というのでしょうか、確かカラコルムの近くにあるソム(村)で私たちのために羊を一頭殺してくれました。トルコやイランなどのイスラーム系の遊牧民は頭を切り落として血を大地に流してしまいます。モンゴルの殺し方は、仰向けにした羊の胸のあたりを小刀で少し切り裂いてから素手を突っ込んで、人差し指と中指で心臓近くの大動脈をひねり切って即死させます。血は一滴も外に流れ出ません。地面を少し掘った穴に火を燃やし、どこからか運んできた火持ちのいい特別な石を火の中にくべて焼け石をつくります。殺された羊は皮を剥がされ、臓物を取り出した後、頭、四肢に五分されます。高さ約 1 メートルもある大きな土器の壺を火の上に載せ、分割された肉と焼け石を交互に入れて塩を振り、土器に蓋をして蒸し焼きにするのです。蒸し上がるまで約一時間間に、糞袋以外は全て食材として調理され、糞も自然乾燥させれば貴重な燃料になります。血もスープになります。脚の踝(くるぶし)はゲーム用のサイコロになります。廃棄する部分は全くない、実に見事な利用方法です。出来上がった肉は塩味だけなのに、この世のものとは思えないほどの美味でした。この羊は去勢されていたのでしょうか。睾丸



川村さんが作った、モンゴル語の教科書

料理は出ませんでした。小長谷さんの『モンゴル草原の生活世界』（朝日新聞社、1996年）には「タマ料理」について詳しく書いてあります。羊や山羊のタマは丸くないそうで、馬のタマは2個を串刺しにして焼いて食べるそうです。牛のタマの皮は固くて噛み切れなとも書いています。

渡辺：私自身はモンゴルの現地経験があるわけではありませんが、繊維製品を扱っていたので、やはり羊毛・カシミアの印象が強いですね。

若林：ユニクロとかでも、カシミア売ってますね。あれ、どうなってんでしょうね。

川村：新疆産のカシミアのことですね。新疆ウイグル人に対する中国政府の弾圧をアメリカ政府が「人権問題」として批判してボイコットを呼びかけていますが、米中の覇権争いのとばっちりという感じですね。カシミアばかりでなく、綿花も中国は圧倒的なシェアを持っています。日本の綿製品もほとんどが中国産だとのこと。あれ新疆でしょ。それで問題ない。ユニクロはやめないっていつてますから。

渡辺：人権問題もあるようですけどカシミア山羊ばかり増えて、5畜のバランスが崩れると、やはり草原が荒れるそうです。

若林：5畜というのは？

渡辺：ヤギと羊と牛と馬とラクダで、これが上手なバランスになってないと草原が維持できないそうです。なんで、カシミア山羊ばかりになって、草原が荒れたという話は聞きますね。

川村：ぼくが初めてモンゴルに行ったとき、牧民たちが必ず携帯していたのが、ナイフと箸、キセルと煙草と火打ち石、そして懐には木の椀が入っている。ナイフは本来的な使い方の他に、携帯食としての乾燥肉を削ったり骨から肉を削り取ったりするのに用います。モンゴル人は肉をいっぱい食べると思われていますが、実はドイツの方が遙かに多い。肉だけじゃなく穀物は勿論昔から食べています。うどんが主ですが、ホーショールといった餃子のようなものもよく食べています。箸はうどんを食べるときに使います。木の椀はスーテツァイを飲むときや食事に使います。マイ箸、マイ茶碗といった感じです。煙草はゲルに立ち寄ったときや草原で旅人に出会ったときに煙草を詰めたキセルに火を付けて互いに相手に渡す風習がある。その煙草の味や香りで、瞬時に相手の身分や暮らしぶりを判断するのだそうです。

ぼくが小さな頃、「肥後守」っていう折りたたみ式のナイフがありましたね。いまほとんど見かけることがありません。このナイフ一本で随分色々なものをつくりましたよ。いま、ナイフは危ないから持たせてはいけなと学校でも家庭でも言うそうだけど、ぼくはあのナイフはとても重要だと思っている。若林さんのキャンプ場でも、ナイフ一本持たせて子どもたちを森に放すとか、そういうふうにしなないと動物とも植物とも向き合えないでしょう。



永尾かね駒製作所（肥後守の商標件保持者）の肥後守

渡辺：道具が使えない子が結構多くいて、僕もそんなに器用じゃないですけど、刃物が扱えない子も結構いますよね。親も危ないからと使わせなかつたり。

若林：危ないから使わせないのは、ちょっと違いますね。道具を安全に使える事が大事ですよ。

川村：ぼくは薪を割るときに何時も頭に浮かぶ諺がある。たぶん小学生の時に読んだ本で「木もと 竹うら」という諺を知った。木は根元側から刃を入れて割るとききれいに割れる。竹は先端の方から刃を入れるとよい。竹ひごをつくるときに実践していました。こんな先人の知恵などもキャンプ場で教えるといいですね。

渡辺：火の起こし方もそうだし、

若林：ナイフがあれば細かい焚きつけとかも作れますしね。

渡辺：火を起こすのも結構むすかしいでしょう。何も無いところからだと。

若林: 難しいです。

渡辺: 最初は、何からつけます？

川村: 何だろう。モンゴルでは煙草に火を付けるときに火打ち石を使うのだけど、乾燥しているから周りの草にでも火を付けてから、煙草に移すのだろうか。

渡辺: ゲルの中の竈で熾火になってたりはしないのですか？ 必要なときに、火を起こす感じなんですか？

川村: ゲルの中だとストーブがあるけど、草原に出れば何もありませんからね。

若林: キャンプなどで、火打石で火つけるときは、サルノコシカケ科のキノコが使えます。それを乾燥したものがスポンジ状になっていて、それをちょっと持ってカンカンってやると、火種がキノコの中に入って、それを吹いていると火種がだんだんと大きくなって、ある程度大きくなれば煙管とかの火種になるかもしれない。

渡辺: 焼き付けにサルノコシカケなんて贅沢じゃない。漢方では、癌の特効薬でしょう。

川村: 火をつけ終わったら食べる？

板垣: とにかく、生活面で状況に応じてどういうふうにも対応できる力を付けることが、今の教育の面では、まったく欠けてしまっているのですね。

渡辺: コロナ対応でも。本当あたふたしますよね。

若林: なんか、今キャンプブームっていうのがあるけれど、そういう状況に対応することができないなと。ちょっと防災っていうかね、もう災害が起こったときに、対応できないなという、そういう意識が皆のなかにあったり、あとは、それを単純に自然の中で楽しむ、環境を変えて楽しむ、ということもあると思うんですけど。そういう対応力を家族単位で身に着けようという、そういう意識もあるんじゃないかな？

渡辺: 結構、家族連れが多いですか？

若林: 家族連れが多い。

渡辺: ソロキャンプも流行っているみたいだけど。

若林: いや、いや、6割7割ぐらいは家族連れです。比較的、やっぱりちっちゃい子連れてきますね。

渡辺: やっぱアウトドアとか、自然体験させようみたいな感じですか。良い先生いるし、良いよね。

川村: 単純にディズニーランド行くより安上がりだ。

渡辺: それもありますね。待たなくて済みますしね。

板垣: しかし、そういう子供連れでキャンプ場に来る家族はそれで大変結構なんだけれど、今や子供の決定的な人口減少がそもそも問題なのだから、やっぱり社会全体の問題としては、本当に微々たる一部に過ぎない。ところで昼食済ませて来た若林さんに申し訳ないけど、このお蕎麦、やっぱり美味しいですね。

若林: 蕎麦はどうしてるんですか？

渡辺: はい。ここ、蕎麦も2、3種類あるんですけど、若林さんは「鎌倉屋」さんってご存知？ 耕作放棄地を借り受けて、蕎麦を生産している長野県の蕎麦の生産ではNo.1の会社ですが、そのそば粉を使ってレストラン専用に打ってもらって、毎日届けてもらってます。

板垣: 放談はもう既に始まっているので、今さら開始はもう不自然な感じですが、前座というか、口火のつもりで、僕の方で一応作った資料がこれです。(板垣代表作成の資料については、5ページ以降の引用枠内に掲示しています。)

若林: これは、皆さん持ってるんですか？

板垣: 川村さん・渡辺さんにはメールで前もってお送りしました。あと、これから佐久総合病院の色平先生が駆けつけて来られます。今日の放談会の企画を話したら、13時までの診療を終えたら松本に跳んで来るそうで、今朝参加可能が分かった若林さんの分と2人分のコピーを作ったのです。

若林:ありがとうございます。

渡辺:松原先生はお元気なんでしょうか？

板垣:お元気なのだと思います、様子をちょくちょく聞くことはしていないのですが。奥様が絵を描かれるので、そうした作品の葉書が時々来るので、何も問題はないのと勝手に察しています

渡辺:張承志先生は？

板垣:その後は、北京から少し離れた郊外に引越したと聞きましたが、最近はまだ北京に戻って、老人の施設ではないようですが、でも広く言えばその類のところにご夫婦で落ち着かれたそうで、索颯女史はご亭主に関する評伝『箭離弦』(60万字)を著述され、張承志さんご自身は「妥協しない心情でモンゴル史勉強の総括として「刃に跨る帝国」というエッセイを執筆中」とのことです。

渡辺:もう1回、日本にこられるかどうか？とおっしゃってた記憶があるんですけど。

板垣:3年前でしたか、来日のときは数次ヴィザを貰っているから、また続けて時々は来日可能という話でしたが、パンデミックのせいで、どこの決定か詳細はわかりませんが、数次ヴィザは取消しとなったため、いつ行けるかわからないというメールが来ました。さて、そろそろ色平さんが到着される感じの時間になりましたね。それは気にせず、話は進めていていいと思います。どうしましょうか？成行き任せ放談会だから進行を誰かが取り仕切る必要もないのですが、おのずと話題が移り変わっていけば面白いのでは。そんなに長い時間とはせず、ある程度コンデンスされた格好でやりましょう。改まって、さて本番という感じでなく、さっきから既に始まった続きの感じで行きましょう。一応の狙いとしては、e-定例会という形で、この松原さんの本と張承志さんの本とを、会員はじめ勉強会に関心を持ってくださる方々に読んでもらう、読み物の原型となるお喋りができればという企画だという点だけ、念頭に置いてください。でも、本の内容を追うことばかりに執着せず、もう今日顔を合わせた途端から始まったモンゴルの景色とか、砂漠の色とか、雄のタマ料理とか、そんな遊牧民の暮らしや風土に関わるお話の続きを自由に混じえて、楽しく読めるものにしたいと願います。アッ、色平先生が到着されました。色平さん、どうぞお入りください。

色平:ごめんなさい。失礼します。

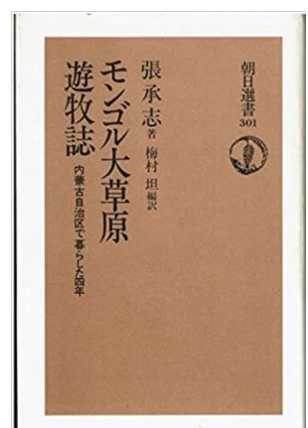
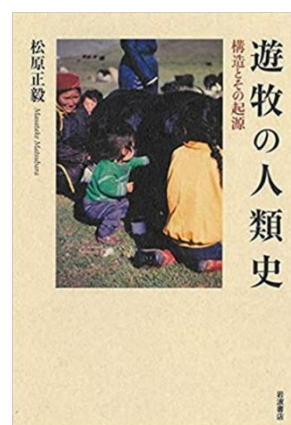
板垣:いやどうも、なかなか2時は無理じゃないかと、ずっと言っていたところで

色平:今日、外来が久しぶりに早めで終わったもんですから。私、医者でございまして。どうも皆さんすいません。私、闖入者で、どうぞ続けてください。今日はいろんなお話を伺えると聞いて来ました。

板垣:ちょうど始めようとしていたところでした。前座用の資料を土台に、松原正毅さんと張承志さんとの二つの本について、これからのわれわれの放談の記録を読んでもらう読者向け紹介も兼ねた解説をさせていただきます。

色平:張承志先生と、ここでお話しましたもんね。

板垣:2018年4月22日に張承志さん夫妻を歓迎する信州イスラーム世界勉強会の内輪の懇親会を奇しくも今日われわれがこうして集まっているこの会場でやったとき、色平さんも参加され、お会いになったのでしたね。2019年6月15日に、信州イスラーム世界勉強会が松原正毅さんを松本に迎えて「遊牧の人類史」の講演をしていただいた内容が敷衍・展開・詳述されたのが、講演の演題と同名のもう一つの書物。



松原正毅氏について（以下、枠内資料は、板垣代表作成の資料による。）

### 略歴

1942年 広島市生まれ、松山市育ち。京都大学で考古学学び、人文科学研究所、国立民族学博物館勤務、教授、同館地域研究企画交流センター長、同館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、坂の上の雲ミュージアム(松山市)館長。

専攻：遊牧社会論、社会人類学。

2011年 9月脳出血、リハビリにより左手と右手中指でPC執筆可能となる。

### 調査歴

アフガニスタン北東部考古学遺跡群騎馬行(1967.8)

ウズベク人・トルクメン人とトルコ南西部の遊牧民ユルック(1979～80)

モンゴル(1982, 93, 95, 96, 97)／ブリヤート(1997)／トゥバ(1996)

新疆(1982, 83, 91, 92, 93)／内モンゴル(1982, 2000, 01)／青海省(1984, 85)

チベット(1985, 88)／カザフスタン(1992)／キルギスタン(1997)

ウズベキスタン(1995)／トルクメニスタン(1996)／アゼルバイジャン(1993)。

### 著書

『遊牧の世界:トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』中公新書上・下、1983.のち平凡社ライブラリ

『トルコの人びと:語り継ぐ歴史のなかで』NHK ブックス、1988

『遊牧民の肖像』角川選書、

1990.『カザフ遊牧民の移動:アルタイ山脈からトルコへ 1934～1953』平凡社、2011.

編『中央アジアの歴史と現在:草原の叢智』勉誠出版、2020.

そして

『遊牧の人類史:構造とその起源』岩波書店、2021

(遊牧研究の先達:今西錦司・梅棹忠夫と、遊牧民への深い愛情と興味を終生たやさなかつた司馬遼太郎とへの報告書)。

そこで、これらの機会に聞いた肉声を思い返しつつ、まずは松原さんの本から始めます。

板垣:この松原さんの「遊牧の人類史」(岩波書店 2021年)という本は、著者自身が言うところでは、遊牧研究の先達である今西錦司さんと梅棹忠夫さんとに捧げられている。それから同時に、遊牧民への深い愛情と興味を終生絶やさなかつた司馬遼太郎さんにも捧げる。いわば、それらの人たちに差し出す報告書。今西さん・梅棹さんを受け継ぐ格好でまとめられた遊牧研究だと言うわけです。今西・梅棹理論の展開・発展。これはその本にも書いてありますが、実は張家口辺りで、敗戦直前ですが、内モン古調査をやっていた過程で、梅棹さんが打ちだしたアイデアを先生の今西さんが先に書いちゃった。しかし梅棹さんは、それは剽窃ではなく、チームとしての調査活動の成果として調査隊長の今西さんが紹介したもの、という態度をとったことから、それは世に今西・梅棹理論として知られるようになりました。それを要約すれば、資料記載の形になります。

## 今西・梅棹「遊牧の起源」理論

野生の馬や羊が血縁・地縁の群れ社会の遊牧圏を維持している場合、狩猟生活者の人間が効率よい方法として群れに随伴して移動するなら、動物の遊牧に誘発された遊牧となり、それは狩猟時代から始まることになる。

野生の馬や羊が血縁地縁で形成している群れ社会に、狩猟生活者の人間が入り込み、そしてなんとなくいつも動物と人間が顔を合わせている式で一緒に暮らしているという状況ができ、それで人間がいつも動物にくっついて歩いている、動物の遊牧圏に共生してしまった人間が、結果として遊牧民という存在になった。だから人間が何か特別の意志で遊牧という生活様式を発明したというようなことではない。人類の歴史でいえば、既に採集狩猟時代に万年単位の長い長い年月を重ねた共生を練習する歴史があつて、そこでもう遊牧という暮らし方が始まっていたのだと、考えるべきではないか、これが今西・梅棹理論です。それを受け止めて、松原さんは遊牧の定義をこの本で改めてやっています、①②③の三要素が有機的に融合したもの、それが遊牧なんだと言う。現生人類が、5畜つまり山羊、羊、牛、馬、ラクダと、1万年以上かけて構築した共生関係(それに後から犬の家畜化が加わります)は、どういうわけか西アジアと中央アジアで非常に顕著な形で展開することになった。これが遊牧の定義だというわけです。それで、彼自身が、広汎な諸地域の調査を行ない(前ページ、調査歴参照)、観察と考察をつうじて導き出された果実の松原説がライフワークというべき『遊牧の人類史:構造とその起源』にふんだんに盛り込まれました。起源の考察は人類の行く末まで達観するものとなっています。そこで松原説とは何かを考えてみると、ここに挙げた三つに整理できるのではないかと思います。

### 遊牧の定義

#### 松原の「遊牧」定義

- ①群居性の有蹄類との共生
- ②乳や毛、皮、肉などの利用
- ③移動性 に富んだ暮らし

## 導き出された注目すべき諸説 (松原説)

- ①遊牧・農耕の起源における女性・子どもの役割  
(人類史の進展における母系制原理と父系性原理の交錯)
- ②遊牧(野生動物の管理)と農耕(野生植物の栽培化)との並列・交流(移動と定住との思想的対立)
- ③現生人類の生活様式の変動という常態  
(社会の永続的な平衡状態など無い、遊牧の滅びと再遊牧化の非連続)

### ① について、

遊牧と農耕の起源における女性・子どもの役割が非常に大きな意味をもつものだという事、その後、遊牧についても、農耕についても、母性系原理で動いていたのが、どちらの場合も父性系原理にとって代わられていくことです。

### ② について、

採集狩猟時代から動物との共生の練習をしていたというところで、どれだけ自覚が進んでいたかは問題だけれども、時間的には、遊牧につながる方が早くから始まったのではないかと、見通した

と思われます。

### ③について

現生人類の生活様式は、どんどん変動するのがむしろ常の形で、永続的な平衡状態などは架空の話、だから遊牧もその中身はどんどん変わり、農耕も変わる。ことに遊牧の場合は、近代国家のもとで、移動ばかりしている人間を国家・国民の中に取り込む、収め込むため、とりわけ 20 世紀の社会主義体制が登場するとその取り込みは暴力化し、ソ連やその影響を受けたところでは遊牧の生活様式は徹底的に破壊されていった。今や 20 世紀のギリギリ末から後の「再遊牧化」が問題になっているけれども、「再遊牧化」における遊牧は、昔からの遊牧とは似ても似つかない面をもっている。遊牧の滅びと、再遊牧化の非連続とが、注目される。こういうおまけもついた生活様式の激動がむしろ常態化している。人間の暮らし方を、遊牧化の効果の有無などというような単純な分け方で問題にするわけにはいかない、ということですね。

それで彼の本の特徴は、何であれ断定的には物を言わない、それが目立つ特徴です。よくはわからないことばかりだということを、まず、最初から断っている、そういう本なのです。これは、松原さんの持ち味というだけでなく、そもそも今西先生というところから始まったスタイルです。さかなの泳ぎを、朝から夜まで一生懸命、川辺で眺めている、そういった式で、そこから今西理論はできてきたわけです。ひたすら観察、それから推理、そして理論化という道筋なんです。より実態に即して言うと、想像から出発、類推をかさね、独創的な仮説を立てる、そして気がいたら、それがきわだつ重要な発見と認められるといった、そんなスタイルの学問と言えるでしょうか。松原さんも、そういう学風を受継いでいるところがあるように見受けられます。

## 「遊牧の人類史」の特徴

観察—推理—理論 想像—類推—仮説・発見

よく分からないことばかり/と思われる/ だろう/ではなかったか/かもしれない/想定される/

理文融合

現生人類の想像力や知的好奇心の評価 最新・最先端の学説・知見・情報・遺跡・出土品・年代測定などへの敏感な 学際的反応と推論への適用/集団遺伝学(言語機能遺伝子 FOXP2)/地球物理学(トバ火山)等々の理文融合

さっき松原理論の第 1 に挙げた女性・子どもの役割に関して、この本の中で第 2 章以降、いろんな形で遊牧の実態について、また遊牧の起源について、研究成果が詳しく示されます。例えば動物(山羊でも羊でもいいのですが)の個体名また名前の付け方については、動物の種一般の総称がまずあり、それから遊牧民にあって特徴的な名称体系としての、オスかメスかとか、何歳かとか、という性差・年齢による名称分類、さらに 3 番目は、個体識別体系としての、体の特徴や体毛によって区別する名付けの仕方、つぎに今度は 1 疋 1 疋の個体の命名という、個体が担う幾通りもの名付けのシステムが説明されます。最後の 2 段階の名付け組合せは、出産・誕生に立ち会って名前を付ける女性と子どもたちによるもので、女性の発言権はまことに決定的だということが注目されます。個体の命名を男は女性に譲るから(牛・ラクダの場合は男性の関与がやや強くなるかもしれないとしても)、群れとしての羊や山羊の個体名を全部覚えていて、何十頭何百頭いようと 1 疋 1 疋を的確に見分ける力を持っているのが、女性と子どもなのです。男子は、成長につれて識別力が失われるらしい。ミルクを利用するところでも、女性の

役割が主導的だった。動物の子と人間の子とが乳を分け合うことが強調されます。

以上のことと並行して、去勢(一定数以外のオスの精巣除去手術、動物の増殖管理・群れ管理・食用肉確保のため)という行為がもたらす効果が、搾乳という行為と対照的に検討されます。先ほど早い到着者3人の昼ご飯を食べながらの雑談で、モンゴルのタマ料理が美味しいという話も出ましたが、玉とは手術で手に入る動物の睾丸です。遊牧における去勢が人間社会のがわで男性原理の強調に道を拓く。動物たちの数を管理調整する行為が、女性原理主導で出発したはずの遊牧民社会の中で、男性が動物の選ばれたオスどもに成り代わって威張る男性原理の台頭へとつながっていったのでした。

松原さんは、本の最後のところで、人類の未来に向かって、草原での移動生活ために久しく痕跡も記録も遺さずに来た遊牧民の歴史が投げかけるメッセージを考えようとするのですが、遊牧の最終期を記述した松原さんの観察は、古いところではヘロドトスがスキタイ社会の見聞を叙述し/司馬遷が匈奴という集団の動きを記述したような、脇からの知見としての遊牧民の歴史の認識に連なるものなのです。それにしても跡かたを残さないようである、遊牧民の移動は世界史の壮大な変転の原動力でした。ユーラシアで西へ・東へ彼らの集団が動くと、次から次とイラン系・トルコ系・モンゴル系遊牧民の玉突き現象が起きる。中国も、ヨーロッパも、その結果として形成されたのでした。中国では万里の長城が象徴となったし、ヨーロッパはゲルマン民族をはじめとする民族大移動がその形成要因でした。唐の長安の都も、黒海の出口のコンスタンティノポリス(現在はトルコのイスタンブル)も、そのような東西交流の結節点でした。やがてチンギス・ハンとその子孫の大モンゴル帝国の出現は、新しい グローバル世界への扉を開く意味をも持つものだった。イベリア半島・モロッコから朝鮮半島(高麗)やジャワまでのイスラーム世界の巨大なネットワークが生まれるのも、その結果でした。現在のウクライナについて考える場合も、もともとそこはイラン系スキタイ、西突厥、トルコ系ハザル(こんにちユダヤ人の主流をなすアシュケナジームの祖先)、モンゴル帝国のキプチャク・ハン国、タタールのクリム・ハン国などの郷土として遊牧民の世界だったことを忘れるわけにはいきません。このような現代的な眼でも、この本から更に発展する形で対話ができたらいいなと思います。

さて話を2冊目の張承志さんの本に移します。これは今となつては古い、1980年代前半に書かれたもので、内蒙古自治区で暮らした4年間(1960年代末から70年代初)の話ですが、それを十年余り経ったところで振り返り、記録としてまとめなおした著作です。先の松原さんの本は、一般読者向けに書かれてはいるが、学術的な仕事なので、それに応じた整理の仕方で紹介してみたわけですが、この張承志さんの本は、これも鋭い観察眼と深い洞察力とによる立派な研究調査記録であるけれど、風土や心情の描写とか人の内面の観照とか詩的抒情など表現・表象の面で強いインパクトを湛えた文学作品でもあります。彼は1948年北京生まれ、所属は少数民族の一つの回族、つまり漢族と同化した顔つきだがアラブとかイラン人とかを先祖にもつイスラーム教徒。宗教は同じイスラームでもウイグル人やカザフ人等々とは異なる伝統を背負うこの人びとをどう扱うかは、中華民国の時代から問題でした。日本が中国の回民(イスラーム教徒)を手なずけて満州国の西側にイスラームの国を創る画策をしていたからです。中国共産党は紅軍の大長征により拠点を西北の延安に移し、抗日戦争下で民族統一戦線を固めるためまず真っ先に「回族」を少数民族と認め、非漢族の55の少数民族構成の先駆けとしました(「少数」と言っても回族の人口は現在ほぼ1千万人です)。



清華大学の付属高校に在学していた張承志さんが自分たちの仲間グループを「紅衛兵」と名付けたのが、毛沢東の文化大革命の号令と重なり、中国全体が一挙に引火爆発したような感じで紅衛兵は全国化、文革の推進者となり、張承志は紅衛兵の命名者にされてしまいました。彼自身はそんな扱われ方から逃げる面もあったと、僕は想像しますが、内モンゴルに下放し、牧民として4年間暮らしました。松原さんが研究者・調査者として牧民社会に入っていくのとは、まったく違う。4年間ぶっ続けに遊牧民と起居を共にするだけでなく、都会の知識青年の人間改造まで迫られる。そういう暮らしをしたわけなので、学術調査とはまったく違う。牧民と密着した暮らしをした面は確かにあると思います。その後、彼は北京大学で歴史考古学を学び研究者として立つ道もあったけれども、途中から小説を書く作家になっちゃった。1970年代の末に、自分はイスラーム教徒なのだというのを非常に強く自覚する。それまで事実上は無宗教だったのが、イスラーム教徒として目覚める。同時に、自分たちの先祖の抵抗の歴史にも目覚めるのです。中国西北部のジャフリーヤと呼ばれるイスラーム神秘主義教団に属する人びとですが、清朝支配下で徹底的な弾圧を受けた。厳しい差別・迫害と悲惨な犠牲を恐れず耐え抜く堅い信念の抵抗の歴史を調べ描く生活に入ったその時期に、たまたま彼は日本の国際交流基金の招きで東京の東洋文庫(三菱系の東洋学研究所)に来て、日本人の研究者らから彼の内蒙古体験を質問されるので、自分自身の当時の牧民生活経験の記録ノートに基く回顧録をまとめたのでした。だから、回心を経て、人間の内面とか 霊性・スピリチュアリティといった類の側面にも目が行き届くようになった段階で、過去を思い返すにあたり自身の観察を深める記述ができた面があったのだと思います。しかも東洋文庫で、梅村坦[ひろし]さん(現在は中央大学名誉教授)という同年輩の内陸アジア遊牧世界の歴史研究者と出会って、梅村さんの協力を得ることになり、張承志さんの『モンゴル大草原遊牧誌』(朝日選書 1986年)は素晴らしい日本語の本としてまとめたのです。以上かいま見た事情から、この本は、松原さんの本とは少し違う読み方をするのが適切かつ必要なのではないかと、そんなことを考えました。

## 張承志氏について

### 略歴

1948年 北京生まれ。回族。

精華大学付属高校で自分たちのグループに名付けた「紅衛兵」が文化大革命の潮流を惹き起こす。

1968年から「知識青年」として下放(正しくは上山下郷)し内モンゴルで牧民生活。

その後、北京大学卒(歴史・考古学)・中国社会科学院民族研究所研究員。

その間、小説を書き国家賞 5回はじめ多数の賞を受賞

1978年から、文筆家として自立するとともに、ムスリムとしての回心、回族としてのアイデンティティ再確立も経験。1983年、国際交流基金の招きで来日、東京の東洋文庫で中央アジア・北アジア史研究に従事、愛知大学でも教えた。東洋文庫で深い知己となった梅村の協力で生まれたのが本書。梅村の真情あふれた名文の「序に代えて」は委曲を尽くしているが、張の語りには研究者の観察眼とともに作家の筆力で読者の心を激しく揺り動かすものである

**著書・作品** (ここでは日本語で読めるもののみ挙げる)

梅村坦編訳『モンゴル大草原遊牧誌：内蒙古自治区で暮らした四年』朝日選書、1986。

小島晋治・田所竹彦訳『紅衛兵の時代』岩波新書、1992。

『回教から見た中国：民族・宗教・国家』中公新書、1993。梅村坦編 訳

『殉教の中国イスラム：神秘主義教団ジャフリーヤの歴史』亜紀書房、1993 [原著：『心霊史』、1991]。

岸陽子訳『黒駿馬』早稲田大学出版部(新しい中国文学)、1994 [原著：『黒駿馬』、1981]。

『鞭と筆：中国知識人の道とは何か』太田出版、1995

磯部祐子訳『北方の河』露満堂、1997 [原著：『北方的河』、1985]。

梅村坦監修 訳『中国と日本：批判の刃を己に』亜紀書房、2015 [原著：『敬重与惜別：致日本』、2008]

張承志さんが牧民になった時期とは、どういう時期だったでしょう。中国革命で中国共産党が勝利し中華人民共和国が生まれた後、生産力を高める大躍進政策が破綻して、党内の権力闘争が激化する中、毛沢東の文化大革命が起き全土を覆う過程で、内蒙古自治区も非常に大きな変貌に巻き込まれます。遊牧の暮らしぶりも、局外に立つことは許されませんでした。中国全土一律の人民公社、その生産大隊、こうした上からの組織化の大波が押し寄せる過程で、彼は牧民として働いたのでした。すなわち、牧民の暮らしがまだ何とか機能し、伝統がスレスレ生き延びていたところで、貴重なこの回顧録が書かれたという面があるだろうと思われます。そこで、この記録には、特定時点での描写というだけでなく、張承志さんの私的懐旧を通じて、滅びかねない遊牧という生き方への郷愁とも言うべき〈懐かしさ〉への〈いつくしみ〉の響きが通奏低音となって鳴り続ける格調高いメモワール、一つの文学的達成として読まれる価値があるでしょう。そういうことから、書物の目次、章立て、節立て、話題項目として彼が示した、柱立てをそのまま引き写すような格好で、書物の構成を通観できる形でまとめてみました。

### モンゴル大草原遊牧誌の構成

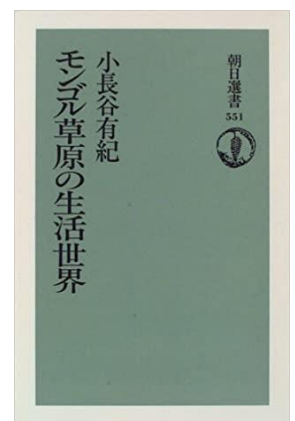
#### 書物の構成

1. 揺籃 ハンウラの自然[輝く夜光玉/ハンウラの名所] ハンウラの人びと[六〇戸三五〇人/飼料基地/家畜群]  
草原の変容[遊牧経済の変質/土産公司/宗教/小学校]  
アイマク(家族)[家と血統/姓と家族/アイマクの実際]「貴社賤老」[老人/養子/労働力]  
悠久の大草原
2. 生命 人の誕生[出産/アラホアの家族]  
再生産[羊の出産準備/羊の誕生とアイル(ひとつの聚落)の労働/馬や牛の場合/双子の誕生]  
牧民の才能[個体識別の能力/ガオランガイ(仔を邪険に扱う母畜)]  
草原の春[春の災害/生命の歓喜]  
アラホア家の羊の一年[ハンウラの放牧の概要/羊の群れ/羊の増減]
3. 白色 乳の季節[夏の到来/夏営地] 夏の労働[羊毛刈り/去勢]  
白い食べ物[基本食品/搾乳技術/乳製品/チャガン(白い)]  
馬捕り[たてがみ切り/種馬捕りゲーム] 夏の祝典・ナイル(祭り)[金の草・銀の草/競馬/  
モンゴル相撲/草原の喜び]
4. 遷徙 遊牧と定居[遊牧の周期/秋のオトル(秋の頻繁な移動)]  
秋の副業[きのこ採り とタバラガ(リスの一種)狩り/遊牧経済の将来] 冬の準備[青草刈り/  
羊囲いの設営/ 燃料あつめ]
5. 雪国 冬営地[静かな冬の訪れ/食肉の用意/冬の放牧/ストーブの火]  
白い災い[脱出行/ある斑牛の話/氷雪原から山頂へ]  
冬の労働[塩運び/冬の馬群/尾なし羊の話 /井戸掘り] 狼狩り[巻き狩り/すぎゆく冬]
6. 牧民 牧民の本質[生活と生産の一体化/牧民男性/牧民女性/遊牧生活と家庭]  
牧民の一日[朝食/放牧へ/草原の事故/夕刻の作業/夕食/生活片々]  
人と動物[犬の役割 /老犬ジリグ/動物との一体感]
7. 古歌 牧民の内面世界[淡白な表現/形式の裏がわ] 歌と現実[民謡の主題/駿馬]  
あとがき 本書には多くの写真、スケッチ、図(概念地図的なものを含む)が挿入されていて、  
張承志の 絶妙の筆力が描き出すヴィジョンに加勢する感じ。読者の抱くイメージを膨らませます。

彼が立ち会い/参加していた/遊牧民の暮らしの記録を、ここで読者としてどのように読み込むのか、その議論そのものに意味があるのではないかと思います。松原さんの本は学術書、張さんの本は文学作品、と分類して済ましてよいかも問題です。この張承志さんは、  
中華人民共和国内蒙古自治区「錫林郭勒盟 東烏珠穆沁旗 道図諾爾人民公社 汗烏拉生産大隊」、

こういうところに所属して 4 年間 暮らしたわけですが、そこで、彼を受け入れてくれたのがアラホアという人の一家で、この本の到るところでこのアラホアさんは著者の彼にとっては「お兄さん」という位置づけで、モンゴル社会に受け容れられたわけです。本の到るところで登場し、到るところで感謝しています。松原さんは松原さんで、トルコ南西のタウロス山脈の山あいの、遊牧民の営地のテントで 1 年余り居候させてもらうわけですが、そこで世話になったスレイマン・シャヒーン一家とか、それから松原さんの父親役を演じてくれたルザ・ババという人、それらに深甚の感謝を捧げるわけですね。とにかくそういう援助し保護してくれる人たちとの繋がり、そうした絆が、社会的にだけでなく、人間同士の関係・人格的影響の面でも大きな意味を持っている共通性は意味深長です。二つの本の読み方はおのずと異なると思いますが、遊牧民との付き合いの中で、否応なく現れ浮かび出る共通面には、注目しなければならないと感じます。ちょっと長くなりましたが、こんな風な私なりの読み方を、お話してみました。話題を拓ける格好で、私とは違う読み方でも、あるいは自由に本を離れてでも、議論を展開させてください。川村さん、渡辺さん、まず何かからでもいいからご発言をお願いします。

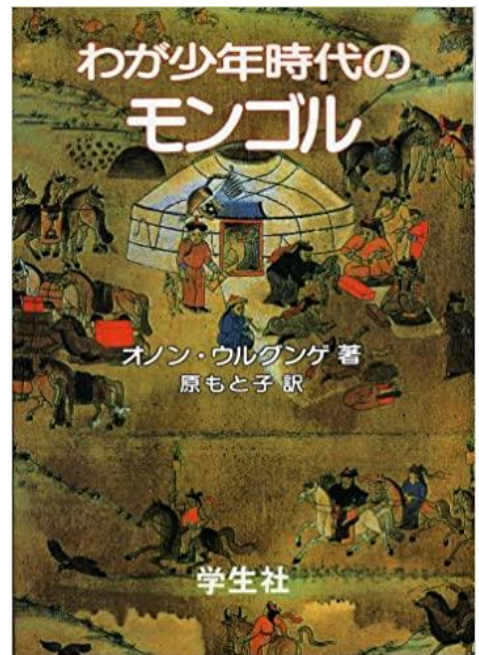
川村：ぼくは松原さんの 3 年前の定例会でのお話がとても面白かった。それで今回、『遊牧の人類史』を期待をもって読み始めたのですが、遊牧民が自らの歴史を書き残していないこともあり、学問的に断定できないことが多くて、どうしても表現が曖昧になりがちで途中で投げ出しそうになりました。でも最後のパートやあとがきでは伸び伸びと筆が滑り、定例会でのお話とも結びついてホッとしました。何が書いてあるかという、(ぼくの読み方ですが)遊牧社会、遊牧民の暮らし方を再評価することによって、いまわたしたちが直面している諸問題を解決するヒントが得られるのではないかと、社会人類学の立場から提案しているわけです。松原さんと同じく民博の小長谷有紀さんの『モンゴル草原の生活世界』(朝日新聞社、1996)は内蒙古で牧民と暮らした経験を去勢、搾乳、屠畜という牧畜三大儀礼を中心に書いている。地理学、文化人類学からの目線で遊牧民の伝統的な生き方が難しくなっている状況を報告すると同時に、『遊牧がモンゴル経済を変える日』(出版文化社、2002)では市場経済にのみ込まれているモンゴルの経済を遊牧が立て直す方策はないだろうかと考えようとしている。一方、草地学、草地生態学を専門としている三秋尚さんは『モンゴル遊牧の四季』(鉱脈社、1995)で、「厳しい自然環境の草原で暮らす遊牧の民は、自然の息づかいを体を感じながら、あらゆる資源を巧みに活用して四季の牧地を家畜と共に移動し生計を立て、生態系への付加が自然の破壊をもたらし、自らの生存の危機を招くことを知り尽くしている。... 私たちの国の農業は自然との共存という農業永続のための基本的認識を軽視し、この 30 年来、工業化農業技術は全土に普及し、化学資材の多量投与のため、地域の自然システムへの負荷は強まっている。自然環境の破壊を極力抑制すべき立場の農業は逆に環境への加害者となり、その存立基盤である土地は病み、地下水は汚染され、食べ物さえ危険にさらされている。... モンゴルの遊牧には、私たちが忘れてきている持続可能な農業の生産システムを再構築するための共生の思想と実践の生きた教材が詰まっている」と書き、ほぼ同時期に 1 年前後を遊牧民と暮らした 3 人がそれぞれの学問的立場から遊牧社会の消滅しつつある状況に危機感を抱き、その危機感が工業化によるこの地球の破壊、人類の破滅に通底しているという認識で共通していることにわたしは共感を持ちました。



「近代国家制度の形成は 18 世紀末頃から西ヨーロッパを中心に進行する。... (その) 思想の中核

となったのが、土地の私有化である。... 土地の私有の進行は、国境線の厳密な確定と関連したものであった。... 近代国家制度の形成は国民国家の創出でもあった。国民国家の創出にあたって、国民や国語が生み出されてゆく。(そして) 少数民族問題や言語消滅問題が発生した。(さらに) 植民地問題も引き起こしている。... それは近代国家形成が一国の国益至上主義を追求する仕組みであったためでもある」という松原さんの言説には説得力があります。トランプ前米国大統領の登場以来顕著になっている世界的なナショナリズムの台頭や少数民族への弾圧、領土拡大の動きなどを思い起こさせます。月面の土地売買の話も単なるジョークとは思えなくなってしまいます。

張承志さんの『モンゴル大草原遊牧誌』は内蒙古シリングル盟東ウジウムチンの村で1968年から4年間暮らした記録です。68年はわたしがモンゴル人民共和国のアルタイ山脈でモンゴル人登山家と一緒に登山活動を行った年です。そのとき山麓までの道中で出会った遊牧民や立ち寄ったゲルの風景などを思い出します。張さんよりも40年ほど前に内蒙古で少年時代を過ごしたダグール族のオノン・ウルグング(1919-2013)さんが書いた『わが少年時代のモンゴル』(原書はオクスフォード大学出版刊の”My Childhood in Mongolia”. 原もと子訳、学生社、1976)も合わせ読むとまだ健全だった頃の遊牧生活の一端がわかるだろうと思います。わたしは磯野富士子さんの紹介でオノンさん(当時、英国のリーズ大学教授だった)に会い、この本を頂戴しました。



ニキータ・ミハルコフというロシアの映画監督がいます。「黒い瞳」とか「太陽に灼かれて」などの作品は日本でも知られていますが、91年につくった「ウルガ(Урга)」は小劇場で短期間しか上映されませんでしたから余り知られていないと思います。ぼくはこの映画を見て感動しました。中国領の内蒙古での遊牧民の暮らしを描いています。ウルガ(モンゴル語では「オルガ」と発音する)は約5メートルの長さの柳の枝先に紐の片端が固定され、もう片方は竿の途中に輪を作って結び移動できるようになっている。野生の馬や去勢する馬を捕まえるときに馬に乗った男の牧民はウルガを小脇に抱えて追いかけて、馬の首に紐を引っかけてとらえる。西部劇でカウボーイが使う投げ縄と同じです。これが出来ないと一人前の牧民とは認められない重要な仕事であり道具です。西部劇と違うのは、草原にこのウルガを突き刺して立てておけば、近づいてはいけないよという合図になることです。ご存じの通り、モンゴル・ゲルの内部には仕切りがありません。親と一緒に住む若い夫婦にとってこれは不都合なことです。気を利かせた親は外に出て時間をつぶすでしょう。若い夫婦が草原に出ることもあります。草原は



騎馬の牧民が持っているのが、文中に登場するウルガ(オルガ)

自由な空間です。ウルガをもって外に出るのはセックスをする合図です。ストーリーはどうでもよしい。映画の最後は、ウルガを手にした男が草原に向かって歩いていき、追いかけるように若い女がついて行く。そのシルエットがきれいだった。カメラはやがて草原に直立するウルガに寄ってゆき、草原を吹き渡る風にウルガは揺れているが、それは若い夫婦が抱き合っていることを暗示しているようだ。ウルガのはるか先方に大きな黒いものがぼんやりと映っているが、カメラはその黒いものにズームインしていくとそれが工場の煙突であることがわかる。煙突は黒い煙をもくもくと吐きだしている。カメラがさらに煙突をなめるように下に移動していくと、巨大な工場を取り囲むフェンスの下に プラスティックなどのゴミが舞っていて、非常に象徴的な画像なのです。張承志さんが体験した内蒙古での遊牧生活から 20 年余りのあいだに、遊牧民を取り囲む環境が随分変化したなということ。ゲルのすぐ側まで工場が迫ってきていること。遊牧民が大事に守ってきた草原が大量の廃棄物で汚染され始めているということ。妻の頼みで街に避妊具を買いに行くのだけど、恥ずかしくて買わずに、テレビや椅子を買ってくる。中国の一人っ子政策を皮肉っているようだが、テレビや椅子を買うということは、遊牧民がもはや移動をしなくなったことを意味していると、ぼくは思いました。

ゴミのことで言いますとね、遊牧民が移動した跡にはゴミがないんです。俳優の小林薫もびっくりしている。この写真(と雑誌『MR.』を開いてみせる)を見て下さい。この雑誌は男性ファッション誌です。92年11月号ですけど、なぜか「男たちの夢の国、モンゴル」と特集を組んだ。この中で小林薫とカメラマンの高橋昇(のぼる)の対談が面白いので、ちょっと読み上げます。

高橋：「先ず驚いたのはね、日本の4倍とかっていう広さでしょう。でも、柵がないでしょう国中に。柵があるとこっていうのはさ、動物に入ってほしくない飛行場とかさ、宿泊所とかでさ、逆に、人間の方に柵があるようなもんでさ。」

「いちばんすごさを感じたのはさ、彼らの生活に、何も持たないっていうのがあるでしょう。物欲がないんだよね。」

小林：「あの徹底の仕方っていうのか、あのモンゴルの生活の中で厳選されて、もう、そうしないと生きてこれなかったからなんだけど、我々には所有するっていう意識がどっかにあるでしょう。でも、彼らにはみごとなくらいにない。」

高橋「要するに、物欲に負けたらさ、彼らは移動できなくなって、移動できないということはすなわち死ぬってことでしょ。それで、本当に一時間ぐらいでバタバタと荷物を畳んじゃってさ、草原の向こうにいなくなっちゃうでしょう。その跡に残った草の円。ゲルの立ってた跡。円だけ残して消えてしまう。」

小林「かっこいいんだよね。何も残さないっていう引越しの仕方、すごいんですよ。」

高橋「モンゴルへ行って、何もないうことが、どれほど豊かかっていうことを教えられたような気がする。彼らは全然感じていないにしても、こっち側から感じるものってものすごくてね。ショックを受けたね。」

小林「だから、話が飛んじゃうんだけど、日本でエコロジーの運動なんかやってる人なんか見ると、どっちにしてもそこまで徹底してないんだったら、やめとけって言いたいね。」

高橋「くそくらえ」

小林「ウンコって言えば、(ゲルにはトイレがないから) その辺で野グソするってことになっているで

しょう。でね、東京から来て、初日の時のウンコっていうのはね、ちり紙持ってね、なるべく遠いところまで行くだよね。ゲルから遠ざかるわけ。だけどね、真っ平らでしょう。木があるとかで隠れるわけじゃないでしょう。ぱっと振り向くとまだそこにゲルが見えるのよ。10分とかかなり歩いてるんだけど、本当に見晴らしがきくんだわ。(笑)で、かなり歩いたつもりでしゃがむでしょう。し終わって、風が吹いたのね、ものすごく気持ちよかったわけよ。だってね、囲まれているんじゃなくて、360度空の下でさ、それでさ、風がおしりをなでていくっていう。モンゴルのウンコは、僕は感動的だったなあ。

それで東京に帰って家の近くのゴミ集積場を見ると、下宿していた学生が引越した後なんかは色々な電化製品やら、机や椅子など大量に捨ててある。生ゴミの回収は週に2回あるけど、そのたびに大きなゴミ袋が積み上がっている。ぼくたちは戦争直後のものがなかった頃のことはずっかり忘れ、大量生産、大量消費、大量廃棄という暮らしを続けてきていまに至っている。便利さ、効率を求めて豊かに暮らしているようだけれど、「幸福度」は世界でも下の方だという。日本の食糧自給率は、世界の「先進国」のなかで最低水準にあるにもかかわらず、世界各地から運ばれる多彩な食べ物が食卓に並んでいる。グルメブームは美食追求に拍車をかけている。だけど、わたしたちはそれらの食品が誰によって、どのように生産されているのかを知らないままです。

「モンゴルの遊牧民の食卓に並ぶのは、自給の乳と肉、購入する国内産小麦粉の料理だ。自らの手で家畜を飼養し、屠殺し、血の一滴、内臓の一片も無駄にせず利用し、意外なことに家畜の肉をつましく食べている。山羊の乳は主婦の手による伝統的技術でさまざまな乳製品に加工される。子どもたちは屠殺の現場で、家族同様に扱われた家畜の死を見つめ、人間が肉を食べて生きることの厳しい現実を体にたたき込まれるのである」(三秋)。蒸留酒のモンゴル・アルヒや馬乳酒、あるいはスーテーツアイを飲むとき、彼らは薬指を杯にいれ、天の神、地の神に弾き飛ばして捧げ、収穫を、自然の恵みに感謝することを忘れない。しかし豊かさや幸福度を計る尺度とは、なんだろうか。

92年に社会主義を捨て、市場経済化を選択したモンゴルでは、全人口の半分以上が首都ウランバートルに集中し、失業率は高く、貧富の差も広がり、家畜の私有が認められるために子どもたちの労働力が求められる結果、児童の就学率も下がっているといえます。小林薫たち(もわたしも)が見た30年前のモンゴルは、いまほとんど見ることは出来なくなっています。

板垣:この雑誌は、今や、とても大事な記念品ですね。

川村:そうなんです。『MR.』のその号には、ぼくたちのつくったモンゴル文字教科書が無償でデザインしてくれた著名なデザイナー浅葉克己さんも寄稿していて、モンゴル文字のことや教科書について紹介してくれました。

板垣:いやどうも、教科書はすごい仕事をされましたね。さっきのお話で、ゴミの問題も、それから境界線を作ってしまう問題も、それぞれにいろんな方向に話が展開していきそうな気がしますし、我々の現在の暮らしを反省するという点でも、おのずと拡がった議論になっていくと思うんですけど、その前にちょっと渡辺さんから、今度は張承志さんの本に関して、…

渡辺:はい。今回の「放談会」に向けて、板垣先生から張承志先生の「モンゴル大草原遊牧誌」と「黒駿馬」、松岡先生の「遊牧の人類誌」を紹介いただきました。まず張承志氏の「モンゴル大草原遊牧誌」について。「モンゴル大草原遊牧誌」は1986年の出版ですが、4年にわたるハンウラでの生活はもう一つ重要な作品を産みだして、それが作家張承志氏の処女作でもあり、出世作でもある小説「黒駿馬（ガンガ・ハラ）」です。「黒駿馬」（岸陽子訳 早稲田大学出版部（新しい中国文学）、1994〔原著：『黒駿馬』、1981〕）の原著は1981年の出版です。張承志氏にとって、ハンウラでの4年間がまず小説として書かれなければならないということは、板垣先生のいわれる、「（モンゴル大草原遊牧誌は）格調高いメモワール、一つの文学的達成として読まれる価値がある。」ということとも関係すると思います。その辺の事情が黒駿馬冒頭の『日本の読者の皆さんへ 「黒駿馬」をめぐって』に端的に書かれていると思うので、要約をご紹介します。

### 日本の読者の皆さんへ 「黒駿馬」をめぐって（抜粋）

私がこの小説を書こうと思いついた動機はひとつの歌であった。一九七〇年か七一年のある冬の午後、ウジウムチン旗の町に近いエルデン・ウーラで、私の耳に、突然、“ガンガ・ハラ”という言葉が流れてきた。たとえウジウムチンの方言なまりがあつたとしても、こんなにも高貴で華やかな言葉をこれまで私は聞いたことがなかった。この言葉を耳にしたとき、不思議なことに、一頭の真っ黒な馬が目の前に現われたような気がした。それはひとつの歌の題名であつた“ハラ”は“黒い毛並みの馬”の略称で、“ガンガ”は、フアッシュォナブルといった語感も含まれていて“綺麗な、とでも訳せようか。私はその瞬間からこの古い歌詞に心魅かれ、とてもこの歌を歌いたかつた。毎日のように放牧中の羊群を麓に捨ておいて、近くのゲルにもぐりこみ、年寄りに頼んで、お茶をすすりながら、この歌の歌詞を一語一句と確かめ続けた。まずその発音を聴いたとおりにノートに取る。意味がわかつたあとで再び丁寧にモンゴル語で書き直す。それは私にとってとても幸せな日々であつた。この古歌をモンゴルの人びとと同じように歌えるようになるという決意が、私をこの作業に夢中にさせた原動力であつた。深夜の平原を、心ゆくまでこの歌を歌いながら、独り、馬の背に揺られて疾駆するとき、私は、この古歌によって心の奥底まで洗い清められるような気がした。



こうして一九八二年、私は私の文学に関する勉強の最初の試みとして、あるいは私の遊牧民としての生活体験の成果として「黒駿馬」を世に問い、その年の全国優秀中篇小説賞を受賞した。が心をくだいたのは、この歌に本来こめられている深い感情をさぐりあてることであつた。

今も、忘れることができないのは、あそこ草原に生きる人びとと交わした言葉である。あの草原で、真に中国の底辺に生きる民衆と心触れ合うことができたことは、私にとってすばらしい経験であつた。過酷な労働に伴うロマンティシズム、飾り気のない騎馬遊牧民との付き合いはとても魅力的であつた。そのような日々で覚え続けた言葉は、長く私に影響を与え、私に文章でその感動を書き綴らせた。あそこ聴いた言葉が忘れられなかつたゆえに、私は後に「黒駿馬」を書いたのである。

各章の冒頭にあげた歌詞の中国語訳だけは自慢できる。この下手なストーリィからでも、かつて中国の若き知識青年が、底辺に生きる人びとの文化の中で育まれたことを理解していただければ、望外の幸せである。

一九九四年一月 北京にて 張承志

「ガンガ・ハラ」のがどのような歌か知りたくなりますが、張承志氏が、「各章の冒頭にあげた歌詞の中国語訳だけは自慢できる。」とコメントしている古謡「ガンガ・ハラ」の日本語訳が岸陽子先生(早稲田大学名誉教授)の名訳で掲載されており、日本語で読むことができます。

## 黒駿馬

姿凛々しく翔りゆく — わが黒駿馬よ

繋がれているあの門辺 — あの榆の木の車に

すなおで心の美しい — わが想う娘

山のむこうに嫁いでいった — 遥か遠くに  
過ゆく道に — ハオライと呼ぶ井戸

井戸辺にはない — 桶も水槽も

過ぎゆく路に二つ — アイルを組んだゲル

ゲルにもいない — 愛しい娘は

あの娘の消息羊飼いに聞けば

羊糞運んでいったそうな

あの娘の消息牛飼いに聞けば

牛糞運んでいったそうな

眼をあげて、果てしなき野を見渡せば、

よもぎ茂る山の尾根にあの娘のすがた

黒駿馬は首を挙げて飛ぶように走る、あの山の尾根に

私に見慣れたたおやかな姿、でもあの娘ではない

「黒駿馬」は、行間からモンゴルの大草原や畜群の姿が彷彿とするような大変美しい小説ですが、「日本の読者の皆様へ」に書かれているように、張承志氏にとってハンウラでの4年間は、その後の生き方に迄影響するような、強烈な体験だったわけです。張承志氏を揺り動かした体験がどんなものだったかは、これも「モンゴル大草原遊牧誌」に書かれています。張承志氏が1981年にウジュムチンを再訪した時のハンウラの嫂、レンホアさんの言葉です。すこし長くなりますが引用させていただきます。



私が久しぶりにハンウラを訪ねた一九八一年のことだった。嫂のレンホアは都会の生活を聞かせてくれるように私にせがんだ。話が子供の生活に及んだとき、彼女は突然私にこう言った。

「もしあなたに子どもができたら、私のところへ連れてきてちょうだい。私が一人前に育てて北京に返しませう。いいでしょう。」

「私はもう子供の産めない女になってしまった。今の子供たちが大きくなってしまったら、寂しくなってしまう。私は赤ん坊がいなければ生きていけないのよ。いいでしょう、子どもができたらきっと送ってね」

そして付け加えた。

「もしあなたからもらえなかったら、ほかの人からでも、きつともらいたい。赤ちゃんがいなければ私は生きていけないの」

私はびっくりした。理解できなかった。しかしこの話から私はなにか輝かしいものを感じ取ったのだった。

レンホアのこの言葉をそのまま私の小説「黒駿馬」の中に引用したのは、読者と一緒にこの草原の女性の偉大な本質を理解しようと考えたためだった。」(モンゴル大草原遊牧誌 172-173 頁 6 牧民 牧民の本質／牧民女性)

張承志氏がハンウラで過ごした日々は「文化大革命」の真っ只中だったわけですが、「モンゴル大草原遊牧誌」はそうした激動の時代状況にあって、尚、張承志氏を突き動かした、嫂レンホアの人や生命に対する向き合い方や遊牧社会の持つ力が描かれていて、別の言い方をすれば小説「黒駿馬」の解説書として読めるのではないかと思います。正しい読み方かどうかはわかりませんが。

松原先生の「遊牧の人類史」については、先生の 3 年前のご講演の後、大変ご講演自体が面白かったので私、この「遊牧の世界」(中公新書 683 1983 年／平凡社ライブラリー 2004 年) という調査の記録



を、古本屋で探して読んだんですけど、「遊牧の世界」の中で遊牧民ユルックが、冬営地から春、夏、秋営地へと、こう回っていく中で、下巻の後半に、夏営地で放牧の場所を探す苦勞するということが書いてあるんですね。松原先生と一緒にこの調査に行った時も、既にそういう状態で、これ何故かというやはり、その時には、川村さんがおっしゃったように、かなり遊牧社会そのものが変質してきていて、「遊牧の世界」によると、昔は、大きな部族毎に遊牧をしていて、何千頭という羊が、いやユルックはヤギが中心なんですけど、広い草原を埋め尽くして移動するという形であったのが、オスマン帝国の末期くらいから、氏族単位の放牧になって規模は小さくなるのですが、氏族それぞれが自治権を持っていたということが書かれています。ムフタル制というのですが、

ムフタル(族長)が自治権をもっていたその時代は、例えば住民登録は、そのトルコの行政区で行うのではなく、そこの族長に対して行うという形の制度があったということが書かれています。けれども、それが国策によって定住化政策が始まると、ムフタル制が崩壊して、それぞれの場所でそれぞれの行政府のところへ登録をするようになる。そうすると、逆にそのことを契機にして定住が始まる。で定住が始まると、強制された訳ではなく、ユルックの人たちの中から、今まで遊牧していたんだけど、ブドウを植えたり、

果樹を植えて生活したいという層が出てくるわけです。やはりこの部分っていうのは、今の川村さんのお話の裏表だと思うんですけど、遊牧生活は家族を維持してゆく、あるいは食料生産という観点から見ると、土地の生産性というのはやっぱり圧倒的に定住生活の方が高いわけです。そうすると、遊牧をしてる人たちの中から、私達定住したいっていう話が出てくる。もう一つ、この本の最後のところに書かれていて非常に印象的だったのは、遊牧なんですけれども、塩湖の岩塩の行商の話が出てきます。遊牧をしながら塩湖で切り出した岩塩を、遊牧の途中で定住している人達に売って歩くっていうのが、この遊牧のユルック人たちのもう一つの生業になっていたわけです。それもモータリゼーションによって一気になくなってしまうんですね。今までは 200 kgキロとか 300 kgという岩塩を、遊牧の行路の途中にある塩湖で、ラクダに積んでですね、塩はかなり広い範囲に流通していた。塩という生存に不可欠な物資を流通させることによって、定住者が穀物や生活物資の供給によって遊牧民を支えているように、遊牧民が定住者の生活を支えていた。その意味で遊牧民も決して孤立していたわけではなく、定住者の社会と相互依存のネットワークでゆるやかに結びついていたということだと思いますが、そのネットワークがモータリゼーションによって、一気に壊れてしまう。1台のトラックに何トンもの岩塩を載せて、短時間で全部回れてしまう。これは、もう敵わないという、そういうことが書かれています。最後のページに書かれている松岡先生の文章を引用します。

「遊牧民の定住化は世界的に見ても、「時の趨勢」といった様相を帯び始めたようだ。確かに端緒としては国家権力のエゴイズムから遊牧民定住化をしいた面があったけれど、一度方向を与えられた流勢が自ら加速化していっているおもむきもみられる。それで果たして定住化の流れを止めることができるだろうか。どうもそれは難しい要素が多すぎる。」 まさしく今、僕らが感じているのと同じ問題意識といいますか、同じことが遊牧の世界の、そこでもやはり問題にされていることが、印象的でした。ただ逆に、この「遊牧の人類史」では、一旦そこでそう断じた松原先生が、再遊牧化についてコメントをされています。社会主義体制という、そういう「たが」が外れたことによって、変質はしていますが、また別の形での遊牧というのが始まっているよってことも、書かれている。これもやはり面白いところだなと思いました。その辺になると、それこそ前回の若林さんの「森のなかの読書」と、森の王国みたいな話とどっかで通底するような部分もあるし、ただ、おそらく、今この時点で、モンゴルへ行くと、だいぶ違った景色を見ざるを得ないんだろうなっていう、そういう感想を持ちました。

板垣はい、ありがとうございます。どうでしょうか。私がちょっと長く喋り過ぎてしまいましたけど、それぞれ非常に面白い問題を出していただいたので、次は色平さん何か

色平: 80年代、マニラからバンコクにほぼ西に飛行機で行きますと、ベトナム沿海部を越えると、メコン川がクリアに見えていました。ラオスとタイの国境は、メコン川から微妙にずれるんですけど、ラオス側は森が残っていました。タイ側は悲惨です、ほぼ完全に森が消失し草地というか畑になっていました。ただ昨今は、兩岸ともほとんど変わらなくてきています。90年代初頭に、カンボジアに行ったときも同じようで、この数十年でかなり変わったことと思います。カンボジアでマハ・コーサナンダ師という、生き残った僧侶、サンガのほとんどの僧侶が殺された後で、たまたま海外にいたので生き残ったサンガラージャの僧院へ行って、しばらく滞在していたんですが、彼はポルポトと政府軍の間に、黄衣を着てはいることによって停戦させるような人でした。彼が言うに、今までのゴミというのは自然に還ったんだが、このプラスチックのゴミというのは、私が初めて見る風景なんだ。カンボジアでは今まで、全然そうではなかったんだ、と。全部自然に還

るもので暮らしていたので、ゴミはなかったんだ、という話を 30 年前に伺いました。なぜそんなところへ行ったのかというと、マハ・コーサナンダ師のお弟子さんを日本に派遣してもらうためです。

その前にタイ東北部へ行き、プラ・パイサーン師に日本に来てほしいとお願いしたのは、日本で働いてタイ人女性たちが HIV 感染して、当時のことですから、死ぬんですけれど、死ぬ前にタイのお坊さんに会いたいということからでした。プラ・パイサーン師を、同じ飛行機に乗って日本にお連れしました。

ベトナムやカンボジアにも行かなきゃいけないといけないということで、社会主義化されたカンボジアと、ベトナムのホーチミンに行って、お寺にティク・ミンチョー師が不在だったので、ハノイまで鉄道で 2 泊 3 で行きました。ティク・ミンチョー師というのは、ベトナム仏教界の最高峰、私が「ぜひお弟子さんを日本に派遣してほしい」と言ったら、隣に外務省の若手の人がついてました。共産党がついて、宗教者は監視されてるわけですよ。このように南方仏教そしてチベット仏教のありようが大きく変わるという。モンゴルもそうですが、社会主義化されることによって変わったんだろし、便利な生活が入ってくることで、ゴミが散らかっていく、その変化を、かろうじて私は見る事ができた世代かもしれません。モンゴルやロシアもある程度回ってはみたんです。けれど、皆様のように時間を使って、様々なところを見る事ができていなくて残念至極です。

今回、私もモンゴリストの友人に言われて、「パックス・モンゴリカ チンギス・ハンがつくった新世界」(ジャック ウェザーフォード著 星川淳訳 2006 年 NHK 出版 以下「同書」)という

本を読みました。著者はジャック・ウェザーフォード(人類学者 1947 年生まれ、マカリスター大学教授)、翻訳したのは星川さん、私の友人です。星川淳さん(作家・翻訳家 1952 年生まれ元グリーンピース・ジャパン事務局長)は、屋久島に住んでいるから、ナチュラリストにとっては有名な人かもしれないです。この本に書いてあるのは、チンギス・ハンが面白い人だってことですね。



自分が法の支配のもとにあり、法のもとに君主だということを使ったという。でも彼の子孫は 50 年して、この決まりを守り抜けなかったそうです。(同書 139 頁)

チンギス・ハンがホラズムを落とした後、カイバル峠を超えてインダス川に入ったときに、当初、彼は南回りで帰る予定だったんですよ、(同書 215 頁)

南回りってことは、張騫が紀元前に、多分南方シルクロードがあるはずだと予見した、歴史書に記載されてるルートです。張騫は、司馬遷が書いているように、フェルガナまで行ったならば、そこに竹と絹があったから、自分が初めて超えてくる匈奴の支配下を、誰も超えられない砂漠の向こうに、竹と絹があるってことは、多分中国の南の雲南からインド経由で開いてるところがあるんだろうということを予見し、漢の武帝は南を探索したけど発見できなかった。ここをチンギス・ハンに戻ろうとしたんですね、インダスからガンジスを通して今の雲南へ。ところがあまりの気候のすごさで、北に戻ったという話がある本にありますね。モンゴル人はどうも 完全に同じルートに戻らないという感覚があったようだというふうに、ここに書いてありました。(同書 215 頁)

たった2年でセルジュークや、ヨーロッパ人が200年かけても落とすことができなかった、あのバグダードを落とした後、アーゼリーつまりアゼルバイジャンを中心にするような、イル・ハン国って後に呼ばれるようなものを作ったとのこと。(同書 299 頁)

どうもモンゴルは、中国人にも大きな影響を与えたようです。中国人はあまり認めてないですけど、政治体制は学究的な無給の官吏に依存しており、だから中国の科挙の人たちって、エリートだけお金もらってないから、どっかからもらうしかないというのが、腐敗の温床だったわけですね。にもかかわらず、モンゴルはちゃんと給料を全国と全統一モンゴル帝国で全部同じ給料を払ってそういう腐敗を一掃した(同書 325 頁)とか、農民たちは、ごく個人的なところまで命令を下す木っ端役人にひれ伏していたんだけど、モンゴル政府は農民を50世帯から成る組織に改組し直して、そして地域に根ざす生活単位や農民の暮らしに広範な責任を負うような、水その他の自然資源、コモンズを管理するような、あるいは飢饉の際に、食料を供出するような制度を作ったってことです。(同書 327 頁)

元の統治下は、かなりいい線いっていたようです。この元が北元になってモンゴルに帰った後、モンゴル民族は滅びなかったんですが、なんと清は帰った後滅びるんですよ。どう違ったのかっていうのが、世界史上の大きな話のようです。

モンゴルは、世界を征服しましたがけれども、四つの境で敗戦しました。日本で敗戦し、ジャワで敗戦し、カイロの手前で敗戦し、シリアですね、アイン・ジャールートの戦いで、フラグが戻った後、負けちゃってる、マムルークに負けた。ポーランドを含む、この四つの境の線の外側と内側とで、良い悪いは別にして、古来の物が残ったのと、世界帝国が創りあげた世界史の中で、1世紀という前例のない期間平和を享受し、商業技術知識の面でも空前の爆発的發展を遂げる、という区分が生まれた様子です。(同書 338 頁)

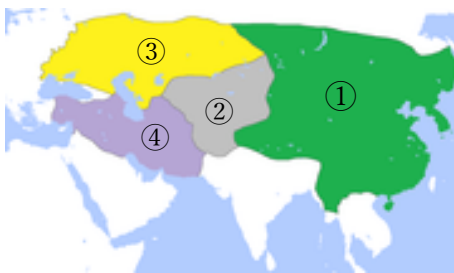
モンゴルの統治を受けなかったヨーロッパ、或いはモンゴルの脇にいたロシア、特にアレクサンドル・ネフスキーが有名ですけど、彼が史上では、どういうふうにもンゴルの遺産を引き継いで、ロシア語では何ていうのかな、モンゴルの軛というものを、後で言い直すことになる。(同書 365 頁)

実際には、ものすごい高度の文明から何を学び取ったっていうのが、紙とか印刷術とか火薬とか火器、羅針盤等、こういうルネサンスの根源のほとんどがモンゴルの帝国であって、ルネサンスで再び生まれたのは、ギリシャ・ローマの古典古代ではなかっただろう、というのがこの本の趣旨です。(同書 369 頁)

モンゴル帝国の恐ろしい脅威を既に感じなくなったヨーロッパ人は、このチンギス・ハンの帝国に面白いと関心を抱き始めたようで、隣のイスラームをヨーロッパが軽蔑するあらゆるものを代表するものにする。そういうものに仕立て上げた一方、モンゴルは対比して、自分達が素晴らしいもの、ユートピア的な所、ジェフリー・チョーサーが14世紀の末に、モンゴルの偉大さというものを書いてみた。チンギス・ハンの生涯と偉大さに関する、ロマンチックで夢のような物語をチョーサーは書いています。(同書 373 頁)



モンゴル帝国の最大版図



- ① 大元ウルス (元朝)
- ② チャガタイウルス (チャガタイ=ハン国)
- ③ ジョチウルス (キプチャク=ハン国)
- ④ フレグウルス (イル=ハン国)

図はウィキペディアからの転載

ペストはご存知のように、南中国から起こり、隊商を通じて、サライ（キプチャク=ハン国の首都）からヴェネツィアの方に入って、最後はバイキングを滅ぼすところまで殆ど世界を一周することになるわけですが、モンゴルがどういうふうに関与したのか？中国の都市では、華北の人口 90%が亡くなる位のものすごさ。

(同書 377 頁)

アイスランドでも移住者の 60%が死亡し、グリーンランドのバイキング集団はこれで絶命してるんですけど(同書 379 頁)、そういう世界の交通体系というものを大きく変える、グローバリゼーションそのものだったんですね。外からやってきた征服者でありながら、1000 人対 1 の人口比で人々を支配することができたんでしょうか？

これちょっと伺いたいのは、皆様、万里の長城をどのようなイメージで捉えてるかっていうことですね長城線は、ほぼ年間降雨量 500 ミリの線で満州里から騰越までのラインなので先程の言うと、この 500 ミリのラインよりも南側であれば、農耕できますし、北側だとアウトですよ、これコントラ・インディケーション(禁忌)でやったら草場がアウトなので、今やると持続可能性がほとんど全くなくなるので北には入れないようにしなきゃいけないという、南側に留めておきたいという要請がある。で、この長城線を歴代王朝は紀元前からどういう体質の王朝が、中国人、漢族を南に留めていたのかというと、歴史上で殆ど北側の征服王朝ですから、南側の王朝に限って外に出ないようにその長城線を監視し、南の人は外に出ないために使っていた可能性があるとか、清朝は、案外長城線に手を

入れてないんですね。それが原因で清朝は滅びることになるのかも

しれません。封じていた筈の自分たちの郷に中国人が入ることを結果的に許してしまったことで、もう全く無人の荒野だったところが、開発にさらされるわけですね。ロシアとの係争地になる。膨大な交易物資をモンゴルが、軍の強さがなくなった後も維持していたということが、自分の人口の 1000 倍を支配できる力の根源だったのかもかもしれません。(同書 384 頁)

多くの国では政治から芸術に至る全ての分野で、モンゴル帝国の幻影を保とうとした、クリストファー・コロンブスが目指したのはどこかといえば、あれモンゴルですよ。イザベルとフェルナンドに、説得したのはモンゴルとの連携。場所がよくわからないので、彼らともう 1 回交易をやるために行った。だから、モンゴルの南であるはずのインディアスというものを発見したと思ったので ウェスト・インディーズという名前をつけたというのが、どうも本当かどうか分かりません。この本の著者の解釈です。(同書 392 頁)

ルネサンス時代は賛美したにも関わらず 18 世紀の啓蒙になると、こんどは反アジア思想が広まるようです。(同書 393 頁)

ヴォルテールが、本当に標的にしたかったのはフランス王であるにもかかわらず、フランス王のことを書く  
と自分が危ういので、その代わりにモンゴルに邪悪の要素を仮託して、全て体現させるようなことをして、  
(同書 395 頁)

そういうふうには、一旦貶められたモンゴルの声望を、甦らせるのは誰かっていうと意外な人物で、ジャワー  
ハールラール・ネールです。彼は 1931 年元旦に独房にいて、英国の植民地政府に彼の妻が別の牢獄で  
虐待を受けたという報告を受けて娘に書き始めた手紙が、あの有名な「世界史」です。「ヨーロッパの偉大  
さを認めないのは愚かなことだ。しかしアジアの偉大さを認めないのは、それに劣らず愚かなことだ。」と  
言って、チンギス・ハンが慎重な用心深い中年の男であり、というふうにはアレクサンドロスもシーザーも彼の  
前では顔色を失うという。しかも未来永劫、不滅の法律っていうものが自分の上にあるとね。(同書 402 頁)

皇帝をも支配するってというのは、これは皇帝と言っちゃいけないですよ。本当はローマのことなので漢語で  
言うてはいけません。つまりローマのインペラトルのこと、レス・プブリカ(共和政)ローマ世界の 常識である  
「インペラトルをも支配するルール」という概念をモンゴルがなぜ、受け継ぐことができていたのか。

20世紀になると戦車が開発されますので電撃戦ということで、「元朝秘史」をドイツ語に訳し始めるとか、  
(同書 405 頁)

プラウダが 1964 年に書いたので、血に飢えた野蛮人チンギス・ハンを、進歩的な人物として玉座に祭り上  
げようとする試みに対して厳しい批判をするということは、当然、迫害、死の迫害を以てチンギス・ハンやモ  
ンゴル帝国に言及した言語学者や歴史学者を、全て殺すという弾圧になったのは、ついこの間でありませ  
(同書 408 頁)

チンギス・ハンの帝国は、世界史上最後の部族帝国で、1万年に及ぶ遊牧民、私、先住民のことに非常に  
関心があるので、先住民という含みがどう違うのかと、遊牧民は軍事的にもものすごく強いですよ。鉄砲以  
前までは、遊牧民と文明の間の、狩猟対農耕の、ベドウィンがムハンマドに従って、都市の異教徒の間の  
偶像崇拜を打ち砕いたようなチャレンジ、それはローマとフンとの関係ギリシャとスキタイとの関係にも繋  
がるわけですけど、ヘブライ人のことを思えば、彼らはエジプトやペルシャの人々に比べると遊牧民である  
わけで、カインとアベルの話にも、繋がるんじゃないかと。(同書 410 頁)

チンギス・ハンが、古代の部族社会から立ち上がっているいろんな伝説が残ってますけど、なんと文字も読めな  
い人たちが普遍性に達するという、ちょっと面白い、そして交易、情報通信、大規模な非宗教国家、あと  
近代法、国際法まで打ち立てるといことですね。チンギス・ハンがもう歴史の舞台から消え去ったわけ  
ですけど、その偉大な力はどのように現在に、何かの要因を残しているのか。というような問いかけで、  
この本は終わります。(同書 411 頁)

私が、山の村での診療所長をやるようなきっかけになったのは、京大の吉田寮という寮で「山に生かされた  
日々」という映像作品を上映して、ダムに沈む日本の山の村の人たち、マタギの人たちのことを知ったから  
なんですけれど、この日本列島にあっても近代化によって柳田國男の前の時代に、彼が惜しんだような

世界が確かにあったし、南の島々の中にもあったし、国家の匂いのうすいところで、人々がどのように国家とは関係のない暮らしをしていたかっていうことは、私の師匠であった鶴見良行たちの終生のテーマでもあったので、今日の皆様のご発表、私、フィールドもできていない人間として、大変僭越ではありますが、自分のライフワークに繋がる話かなあと感じて伺うことができました。ありがとうございます。

遊牧を惜んでいるところと、でもどうして皆が定住化してしまうのかっていうところについては、宇沢弘文等のコモンスの議論とも関係があるので、本来コモンスであるはずの草地に、鉄条網を建て、国境線とか、いろいろな隔てを設けることによって、例えば海の民族ですね、インドネシアは1万2000からの島がありますけど、日本の占領下で何があったのかということについて、昨日も内海愛子先生たちとメールのやりとりをしてました。そういう戦時下の日本が行った時のオランダ支配下のインドネシアはかなり分権的で、お互いに海の商売をしていたんですよ。ところが、それが日本によって占領された反動でインドネシア語というものができて、インドネシア軍ができて、それぞれの島の自治的なあり様が損なわれていく過程を、日本人のわれわれの先輩たちがやった島嶼アジア、島のアジアでの話、この延長上に今日の遊牧民の世界、モンゴル世界の解体過程があるかなと感じております。

板垣: いや、何て言うか、陸地の砂漠や草原や、その他のところで、境界なしに動いているそういう人たちと同じく、海の方でも、海を越えて二つの地点を繋ぐ人の繋げ方・繋がり方というのも、本当にある意味、自由自在な可能性を秘めているわけですね。離れた島々を或る大枠で括ってしまうとかね。うん、そんな視界にまで話が発展してきたので、これまたどんどん先へ繋げていけそうな感じがしますが、若林さん、何でもいいですけど、何かもうまったく違う角度から、いかがですか、これまでの話を聞いていて。例えば先のゴミの話などは、もう切実な問題ではありましようが、…

若林: 私、キャンプ場にいるんですよね、

板垣: いやゴミでなくてもいいですよ、どうぞ自由に

若林: そうなんですけれども、今キャンプブームで皆さんキャンプ道具を買うんです。キャンプ場では自分の道具でキャンプするんですけど、他の人の道具を見てこれがいいなってなると、もうすぐ買っちゃうんですよ。今だったら、検索して『ポチッ』じゃないですか。そうすると、今まであった道具をどうするんだろうと思ったり。大量消費の話がありましたけれどそこに繋がっていて、遊牧の人たちがゴミを残さずに去っていくのは物を大事にしているなという風に感じます。物のひとつひとつに対する考え方、どういう思いかをちょっと聞きたいです。板垣先生のお話の最初にあったこの資料の『個体識別』のあたりの話も面白かったです。女性が個体識別の得意なことに関して普段私は思っていることがあって、近所の子供達を私はあまりよく分からないんですよ。だけどうちの奥さんとかは、「あの子はどこの子」みたいに、良くわかってるんですよ。あの子は誰その子だとか。それだからちょっと能力違うなっていうのは実際に思ってます。で、男の子も最初はそういう個体識別の能力をもっていて、大きくなったら無くなるみたいな話、あったじゃないですか？でも、その能力どうなるんだろうと思った時に、私、機械物とか道具とか結構好きなんです。キャンプ場にも道具にハマってるのは、大体男なんです。お父



さんがキャンプ道具にハマって、道具の違いにもものすごい目が行くんですよ。で、つい『ポチツ』としちゃうのは、大体お父さんなんです。なので識別能力って何かそういうふうに変化して、道具の方とか、または政治的な方とか、行くのかなと思いつつ聞いてたんです。もし思い当たること等あれば聞いてみたいなど。

渡辺: 即物的な解釈で申し訳ないけど、個体識別のことについて言うと「遊牧の人類史」の中には、はっきり書いてないんだけど、山羊や羊の出産に立ち会い、搾乳するのが専ら女性と子供であるということに関係しているんじゃないかと。「遊牧の人類史」でも「モンゴル大草原遊牧誌」でも、搾乳するのは全部女性と子供なんです。一方、山羊や羊の母親は、自分が産んだ子供にしか授乳しないので、必ず母子をペアリングしないとイケない。母親のいない子ヤギや子羊ができちゃうと、母親に自分の子供だと思込ませるように、性器の分泌物を塗りつけたり、体臭を移したり、自分の子供だと思込ませる技術についても書かれています。要は、遊牧生活の、食料確保(搾乳)と、畜群の維持・拡大(生殖)に母子関係がとても重要だということで、その大事な母子関係を毎日、見て実践しているというのが大きいのではないかと、僕は思いました。一方、男性は搾乳・出産に立ち会わないし、成長すると放牧に出かけたり、去勢や交易に従事する。「遊牧の人類史」や「モンゴル大草原遊牧誌」の記述だと、放牧、去勢、剪毛が主な仕事と書かれていて、搾乳の現場に立ち会わないし、出産の現場にも立ち会わないわけです。女性、子供の方が、家畜の母子関係に日常的に深く触れている、そこがやはり非常に大きいのだらうと思いました。松原先生のご講演でもう一つ、頭の中に残ってることがあります。言語の発生の話をされたの、覚えてます？それは、全くお互いに言葉の通じない家族が何家族か集まったときに、まずやっぱりコミュニケーション、それもバーバルコミュニケーションが生まれてくるのは、子供同士からだったという、お話をされてました。多分その個体識別と別に、おそらく子供の何ていうか、そういう力というか、要は、言語能力が発達していないので、個別化してないので、そういうことができるっていうような、そんなようなニュアンスの話も一方でされてましたよね。だからやっぱり個体識別の話と、あともう一つ「遊牧の人類史」の中で、少し出てきますけど、言葉の発生とか、言語の発生についても、言及されてます。そういうところも、大変面白いなというふうに思いました。

川村: 個体識別について、やはりこの雑誌「MR. ミスター・ハイファッション」に亜細亜大学でモンゴル語を教えている鯉淵信一さんが面白いことを書いている。1964年の東京オリンピックに参加したモンゴル選手団を激励しに選手村を訪ねたことがあったそう。それから20年以上経ってモンゴルへ行ったとき、街で「鯉淵さんではありませんか」と言われたというのです。体操の選手だったと自己紹介されても鯉淵さんには記憶がない。ぼくも同じことを体験しています。68年に初めてモンゴルを訪れましたが、92年に再び訪れて街を歩いていたら、「川村さんでしょ」と話しかけられました。また教科書を寄贈したことをテレビ放映されたのですが、その夜、24年前に一緒に山登りをしたときのモンゴル側の隊長がホテルを訪ねてきました。モンゴル人は家畜だけではなく人に対しても特別な識別能力を持っているんじゃないだろうかと鯉淵さんは言っています。馬について言えば、毛色だけでも300以上に分類されているそうです。加えて毛の部分的特徴、尻尾やたてがみ、あるいは目や耳、鼻、口、刃、尻、背、駆け方、歩き方などの特徴まで併せて分類している。人を個体識別するときにはどのように分類しているのだろうか、ぼくはどのように分類されていたのだろうか、とても興味のあるところですよ。



板垣: 張承志さんも、やはりその個体識別の話を書いてますが、それと繋がる話で、はぐれて途中でいなくなった馬が、十何年か経って馬としては全然ヨボヨボになってから、「アツ、あそこにいる」と、別の持ち主のところにいるのが発見され、「あれは俺の馬だ」と言うと、言われたがわもその馬が紛れ込んだのは分かっていて、見つけた元の所有者に黙って渡した、という例にも触れています。「こんなに老いぼれるまで養ってやったじゃないか」などとは言わない、という逸話です。

板垣: 少しばかり念のため、色平さんがしてくださった『パックス・モンゴリカ』に関連して、今、われわれは信州イスラーム世界勉強会の行事として集まり語り合っていることから、イスラームと遊牧との関わりについて最後のまとめのところでは考えることが必要かと思うのですが、『パックス・モンゴリカ』という本について、またそればかりでなく一般に欧米人がモンゴルの歴史について著わす書物では、何となく共通に見られる傾向として、イスラームの話は脇に置いてモンゴルの話をするに、注意したいのです。

チンギス・ハンが君主も法の下にあると考えるのは、ユーラシアに拡大するイスラームの通念と切り離せないのではないかと。諸宗教は神が定めたもので、共存するのが当たり前という観念やクルアーンの「宗教に強制があってはならない」という教えの拡がりとも、並行するものです。なぜ、欧米の人たちがモンゴルとイスラームを引き離そうとするかといえば、それはイスラーム憎しだから。ヨーロッパの人たちは、英語ではプレスター・ジョン(ヨハネ司祭)が建てたキリスト教徒の王国がアジアの内陸部にあるとする言い伝えがあり、それが東方への夢をかき立て、イスラームという敵の彼方に味方がおり、それがモンゴルではないかと想像された。そこでフランシスコ会がカラコルムや大都に使者を派遣する。出会うのは、ヨーロッパのキリスト教からすると異端のネストリウス派。西暦 8 世紀には、イスラームやゾロアスター教(祆教)やマニ教とともにネストリウス派キリスト教(景教)も、唐の都=長安までひろまっていたのです。日本から長安におもむいた空海は、そこでそれら諸宗教と接触し、景教にも関心をもったと見られます。それから 300 年余り経て、チンギスの父の仲間、オン・ハン(ケレイト部族の長/ネストリウス派キリスト教徒)の姪がチンギスの妻になるし、それからチンギスの末子トゥルイに嫁ぐまた別の姪のソルコクタニ・ベキは有力なキリスト教徒として影響力を発揮しました。チンギス・ハンは、こうしてネストリウス派キリスト教徒に囲まれていたのです。だからヨーロッパ側はこれと連絡を取り、十字軍をもっとうまくやろうとか、そういう話になるわけです。

欧米では、なんとなくイスラームへの敵対心が働いて、懸命にイスラームをよけて書く癖が無意識的に身についているんですよ。しかし、遊牧の問題を考えると、イスラームのがわにも問題があることに、注目しなければならないでしょう。イスラームは、信仰心の面で遊牧民を信用していない。都市の宗教としてのイスラームは、実は個人の自立/合理性/商い(交易)/自然への適応/清貧/など、その基盤にあった遊牧の精神を忘れてしまった面があって、定住民の極としての都市の宗教だという立場に安住する惰性の弱さ・脆さに足を取られる。イブン・ハルドゥーン(1058-1146)の文明観が指さす通りです。だから、今日的に言うと、世界の行く末について考える場合、イスラームの行き詰まりがどのように克服されるかは、遊牧の滅びの意味を把握することと深く結び合っているのです。ここで、イスラームを遊牧民の宗教と切り棄てる欧米の呪文は多重の知的破産と言うべきです。ヨーロッパの正統派キリスト教から異端として呪詛されたネストリウス派やキリスト単性論諸派の東方キリスト教と親類だったイスラームと戦うため、モンゴルを味方にしようとした正統派キリスト教と、そのエキュメニカルズム(和解と統一の世界教会主義)の現在(殊にウクライナ戦争後)とは、どちらもご都合主義なのか。このようにして、イスラームもキリスト教も深刻な齟齬や

矛盾を抱え込んでいる現実を、しっかり見極める必要があります。

色平: そうですね。私は先生からだいぶ学ばしていただいているので、この著者は受け狙いで人類学をやっている可能性は高いです。ただ、文筆家はイスラームをヨーロッパ人が軽蔑する価値観を代表する存在に仕立て上げたにもかかわらずというのは、わかりますよね。その向こう側に味方がいるってことをあえて言いたいためなんです。

渡辺: 宗教の問題ということになるとイスラームの問題もあると思うんですけど、モンゴルに実際行かれるとラマ教とか、仏教的な匂いが強いような気がするんですけど。この遊牧のモンゴル高原はチベット仏教の世界とも非常に近いように思います。モンゴル人民共和国の初代元首は、チベット仏教の活仏だったと思います。

板垣: 言われる通り、チベット仏教の影響は非常に強い。

川村: 中国領内では、チベット仏教寺院もイスラームのモスクもどんどん破壊されています。

板垣: チベット仏教に取って代わって、キリスト教が一生懸命、入って行こうとするわけですね。

色平: 女性が、子供が中心だっていうのわかりますね。ケアの世界ですね。我々的に言うと、ドクターではナースがやっている仕事で、非常に貴重なことなんだけど、女性、子供たちの絵でも女の子の描く絵は平和な、カラフルな絵でしょう。男の子が描く絵は、メカニックな絵だよ。黒くて、乗り物があって戦争だったりするね。性差がはっきりしてますよね。

渡辺: 孫が生まれましてね、2才の男の子なんですけど、こっちが教えなくても、向こうはやっぱバスとかミニカーとか電車とか、欲しがります。不思議に。ぬいぐるみとか、ああいうものはあんまり欲しがらない。不思議なもので、教えたつもりじゃないんですけどね。

板垣: 予定より延びて申し訳ありません。性差の話になってまだ話し足りない感じですが、お開きにしたいと思います。ご協力、ありがとうございました。

## 読書案内

### 放談会に登場した書籍

「遊牧の人類史：構造とその起源」 松原正毅 著 岩波書店、2021年

「遊牧の世界」 松原正毅 著 中公新書 683 1983年／平凡社ライブラリー 2004年

「モンゴル大草原遊牧誌：内蒙古自治区で暮らした四年」 張承志 著 梅村坦 編訳 朝日選書、1986年

「黒駿馬」張承志 著 岸陽子 訳 早稲田大学出版部（新しい中国文学）、1994年

【原著：『黒駿馬』、1981年】

「モンゴル草原の生活世界」 小長谷有紀 著 朝日新聞社、1996年

「遊牧がモンゴル経済を変える日」 小長谷有紀 著 出版文化社、2002年

「モンゴル遊牧の四季」 三秋尚 著 鈺脈社、1995年

「わが少年時代のモンゴル」 オノン・ウルグング 著 原もと子 訳、学生社、1976年

【原書：「My Childhood in Mongolia」オクスフォード大学出版刊。】

「パックス・モンゴリカ チンギス・ハンがつくった新世界」

ジャック ウェザーフォード著 星川淳 訳 NHK 出版 2006年

### 川村さんに紹介いただいた書籍

『東部内蒙古産業調査 第二班』農商務省、大正5年3月

『蒙古年鑑』昭和11年版（財）善隣協会、昭和11年

『モンゴル—遊牧民と人民委員』オーウェン・ラティモア著／磯野富士子訳 岩波書店、1966年

『騎馬遊牧民』後藤富男（元善隣協会調査部長） 近藤出版社、1970年

『ニースレル・フレーのモンゴル商業の概況』G.ツェレンドルジ著／宮地亮一・宇野章訳ビブリオ 1976年

『遊牧社会の現代—モンゴル・ブルドの四季から』小貫雅男 青木書店、1985年

『モンゴル現代史』小貫雅男 山川出版社、1993年

『世界風俗じてん』（衣食住の巻・アジア）矢島文夫他 三省堂、1978年

（モンゴルの項目は川村が執筆）

『草原と馬とモンゴル』楊海英 NHK ブックス 915 2001年

『MR. ミスター・ハイファッション』1992年11月号 文化出版局

『牧民に与える書』（蒙古文）サンポ—著 リンチェン監修 ウランバートル、1945年

蒙古文字による出版。カラーの牧草の絵 30枚、モノクロ写真多数入った貴重な本

